

釧路市教育委員会 令和元年第11回5月定例会会議録

- 1 日時：令和元年5月28日（火）10時00分から11時40分まで
- 2 会場：釧路市教育委員会室
- 3 出席者
岡部義孝教育長
(教育委員)
山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員
(事務局)
高玉学校教育部長、川畑生涯学習部長、大山教育指導参事、
北澤学校教育部次長、江縁学校教育部次長、藤岡総務課長、
小野施設計画主幹、松本総括指導主事、外崎青少年育成センター所長、
森教育調整主幹、山口給食担当主幹、工藤生涯学習部次長、
澤口生涯学習課長、永井美術館長、佐藤博物館長、
松本ふれあい主幹、牧野阿寒生涯学習課長
- 4 議事録署名人 種村委員、小出委員
- 5 傍聴人数 0人
- 6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 阿寒湖義務教育学校の施設整備について
- (2) 幼稚園、小・中学校の校内研修における研究主題について
- (3) 令和元年度釧路教育研究センター研修講座事業について
- (4) 学校の現状について

7 会議内容

【公開案件】報告事項

(1) 阿寒湖義務教育学校の施設整備について

(森教育調整主幹)

阿寒湖義務教育学校の施設整備については、阿寒湖小学校及び阿寒湖中学校の保護者や地域の方との意見交換を重ね、『阿寒湖中学校の敷地に施設一体型の義務教育学校を建設する』との方向性を決定し、2017年度より、基本設計、2018年度からは実施設計に着手し、建物建設に向けた準備を整えてきたところである。

設計時においても、保護者や地域の皆様から頂いた建物等に関するご意見を伺いながら進めてきたが、その実施設計が昨年度末をもって完了したことから、先日5月10日に阿寒湖まりむ館にて開催した「設計内容報告会」にて、保護者や地域の方に対して、建物の概要、外構部分の計画内容、今後の工事スケジュールなどの報告を行った。

建物については、校舎及び屋内運動場棟、外物置、駐輪場の3棟を計画しており、校舎及び屋内運動場棟の床面積の合計は4,912.07㎡となっている。釧路小学校同様の体育館内包型の校舎とし、教室や管理諸室を体育館の周りにコの時に配置する計画としている。外構部分の計画内容であるが、外物置、駐輪場、駐車場、敷地内の通路、グラウンド、遊具、水飲み場、照明塔などを計画しているところである。

工事スケジュールについては、建物の建設工事は本年7月に着工し、2020年12月中の完成を目指し、完成後については引っ越し作業を行いながら2021年4月の開校に向け準備を整えていく形としている。

「設計内容報告会」では、これらの内容、スケジュールに沿った形で工事等を進めていくことについて報告を行い、皆様のご理解を頂いた。

また、昨年度より設置している「阿寒湖義務教育学校開校準備協議会」については、昨年度学校名の選定をしていただいたが、先日5月10日に開催した協議会において、校歌・校章については、現行の阿寒湖小学校の校歌・校章を引き継ぐことと意見がまとまった。今後は、教育目標や教育の編成など開校にあたってのさまざまな課題について協議していく予定としている。今後とも学校や地域のご協力をいただきながら、開校に向けて遺漏のないよう事業の推進に努めてまいりたい。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

国立公園内の建物という事で、周りの景観とのバランスも大事にしている地域である。パネルで示していただいた色は、前田一步園財団との協議を経て、あの色でOKが出たという事で良いか。

(小野施設計画主幹)

環境省の関係のところだが、まず建物の高さについては13メートル以下の規定があり、その規定の中で収めるような形で設計した。建物の色関係については、周りの色と協調させるような色という制限があり、ベージュ系や白色にしている。色については最終形として決まった色ではなく、今はだいたい白という事で仮定として入れている。今後協議の中で規定に合うような色の中から選択しながら適正な色を外壁にしたいと考えている。

(山口委員)

説明の中で開校準備協議会の中で、校歌と校旗は小学校のものを使うということで、コスト面で良かったという、印象を持った。釧路市で初めての義務教育学校という事で、建物、箱の部分も去ることながら、子ども達にとって魅力のある中味をどう今後作っていくかということでは、開校準備協議会で十分練られて、そして保護者の方々の理解を得られながら進めていく事が重要になってくるだろうと思う。昨日、議案説明でこの内容を聞いた時に、私の方から、こういう事ではどうだろうという話をしたら、保護者からは同意を得られないのではという意見が出た。

具体的には、庶路学園を立ち上げる時に9年間の子どもの成長を、どういう風に仕掛けていくかという時に、小学校5年生にあたる5年目の学年から制服を貸与して子どもたちの意識も新たにさせたかったという、当時の庶路小中学校の校長先生、先生方の思いを保護者にぶついたら、保護者の同意が得られず断念せざるを得なかった。非常に当時の庶路小中学校の校長先生、先生方は挫折感を味わった。その話を聞いて残念だと思った。阿寒湖義務教育学校の場合はどうなのかといった時に、子どもたちにそういう意識を持たせるために、投げかけるのも一つの手だと思う。おそらく保護者の方からは、小学校5年生から制服を買ったら体も大きくなるし、以降、中学校3年生までの5年間1着で良いのかとなったら、途中で買い替えなければならない。経済的な負担があって、保護者の同意が得られないだろうと思う。しかし、そのような課題を保護者に投げかけることによって、小学校5年生、9年間の5年目に当たる学年は重要な学年である、子どもたちにそういう意識を持たせなければならない学年である、ということでの保護者と子どもたちと先生方との意見の対立があったとしても、もめることによって、なるほど、そういうすごく大切な学年なんだという意識は保護者にも子どもにも植え付けられると思った。そういう中味の部分で、なんでも淡々と進めるのではなく、あえて課題を投げかけてそれについて保護者からの反対意見が出て、どうしなければならないか論議をすることによって、実質的な中味の定着が図れるのではないかと思う。今後、開校準備協議会の中味を反対意見が出ないようなパーフェクトなものを提示して、淡々と進めて本当の意味での認識の深まりがないままスタートとなるのもどうなのだろうか。あえて反対意見を誘うような投げかけというのもあったほうが、本物が生まれるかな、と考える。大楽毛中学校の青木校長先生は庶路中学校の校長として、携わってきたので苦労話を含めて聞いてみるのも、参考になるのではないかと思う。

(森教育調整主幹)

4月から協議会の中でも教職員部会を立ち上げて、学校の目指す学校像、教育目標や学年の区切りなどを先に決めていただくという話になっている。その後、制服という話になって

いくつかと思うので、山口委員の意見も参考にして学校の先生方にもお話ししながら、課題を解決できるようにしたい。

(種村委員)

庶路学園のように、教科担任制はあるのか。

(森教育調整主幹)

義務教育学校では、教科担任制を取り入れているところが多く、メリットの一つでもあるので、そういった内容も教職員部会で考えていただく形になっている。

(松本総括指導主事)

教科担任制については、今後そこに配属される先生の教科によって変わってくると思う。例えば教科によっては、6年生は社会の教科担任制にしてみる、理科であれば専門性が高いので4、5年生から教科担任制を入れてみるなど考えている。既に中学校の音楽の先生が小学校の音楽の授業を教えたり、英語の先生が小学校に入って授業をしている現状もあるので、そういうところも試しながら、何年生でどんな教科担任制にしていくことがベストかを併せて考えているところである。

(種村委員)

小学校のテストで、中学校と似たような定期テストをやっている小学校があると思うが、阿寒湖義務教育学校もそのような予定があるのか。

(松本総括指導主事)

どんなカリキュラムを作っていくかというところでは、阿寒湖両小中学校の校長先生とも話しているところだが、先日、ある地域の学校では定期テストを5年生6年生でも、試して慣れさせて、中学校段階になった時に抵抗なく出来るようにという情報は、両校長先生も受けているので、今後併せて協議していこうかと考えている。

(松尾委員)

図面を見て、すごく特別教室を含め配置も分かりやすく、ちゃんといろいろな物が準備されていると思った。多目的トイレの隣にシャワー室があるが、どのような用途と考えているのか。また、阿寒湖の今後の生徒数の推移について、せっかく義務教育学校ができたのに、どんどん子どもが少なくなっていくというのでは、少しもったいないと思う。だからと言って、子どもを阿寒湖に送り込むのもなかなか難しいと思う。その辺の予測があるのであれば教えてもらいたい。さらに、義務教育学校にするという事には問題ないという事で進めてきているが、今の協議の中で地元の方々との関係はうまくいっているのか、心配はないのか教えてほしい。

(小野施設計画主幹)

シャワー室については、1階の左下に特別支援学級の教室を設定している。低学年の特別支援学級の教室になるので、状況によっては失禁等が想定されることでのシャワー室の設定という形にしている。

(森教育調整主幹)

今年度6月1日時点での阿寒湖小学校の児童数が56名、中学生が24名、合計80名と

なっている。推計は2024年まで出しており、小学校の児童が46名、中学生が32名の合計78名ほどである。今年度の推計が90名くらいだったので、78名よりは若干少なくなるかと予想している。6月頭で今年度の推計を出すので7月には新しい推計が報告できると思う。義務教育学校が地元の方たちに受け入れられるか、理解していただけるかというところは協議会が昨年3回開催して、その都度「こういった内容で話し合いが行われました。」という内容で協議会だよりを阿寒地区に全戸配布している。今年も協議会が終わった都度、お便りを配布するようにしている。そういった形で地元の方たちにも分かっていただけていると思っている。

(小出委員)

小学校から中学校に上がる時点で、中1ギャップが問題になっていると思うが、中1ギャップは担任教科制になるだけではなく、小学校6年生では最終学年で、すごく頼りにされて1番出来る、お兄さん、お姉さんという感じで扱われていた子たちが中学校に入ると、何もできない、何も知らない子たちと扱われて、先生も厳しくなり、大きく環境が変わるという事で、勉強以外にも辛くなりギャップを感じる子が多いと思う。そういう事を考えると、義務教育学校で小学校1年生から中学校3年生まで、同じ学校に入って中学校の先生も同じ学校にいるという環境で学校に通うということが出来るようになると、中1ギャップも解消されるのではないかと。そういうところが、義務教育学校のすごくいいところだと感じている。学年の区切りをどうするかというところで、6年生、中1と分けると、そのあたりのギャップを埋めるという作業がスムーズにいくのかというところを疑問に思っていた。山口委員が言っていた、5年生位から意識付けすると言うことには反対ではない。制服が受け入れられるかが疑問だった。義務教育学校は子ども達の気持ちが自然に成長していくのを応援できるカリキュラムで進んでいくものになってほしいと感じていた。

(山口委員)

義務教育学校の話が出る前に、小学校1年生から6年生までの各教科の難易度を考えた時に、一人の担任が自分の得意な教科、不得意な教科ある中で全て教えて良いのか、小学校高学年位になったらそれぞれ専門性を生かした先生方が教科担任制という形をとる方が子どもにとって学力の定着が図れるのではないかと議論が以前からあった。小学校は部内的に可能なところは、高学年になったら理科などは専門の先生がカバーするということもあった。それが、義務教育学校が制度として認められるようになったので、小学校高学年の以前からあった課題はクリア出来る。そして、学年の区切りをどう持っていくか。それで、制服の話だが、小学校6年間のスパンの中でも4年生を終えて、4年生から取り組むという考え方もあるが、小学校低学年から高学年に差し掛かって、それぞれ専門の先生が授業に来るようになるという意識を持たせる事が子どもにも必要である。そういう意識で保護者にも捉えてもらう必要がある、というところに、おそらく庶路学園では制服という具体的な手法を使おうとした。それを、実質的な意味で子どもにも保護者にも、4年目、5年目になったんだから頑張ろうね、という意識を持たせる事が必要なのではないかと。という事で学年の区切りの部分は非常に重要だと思う。それについて、参事の考えを聞きたい。

(大山教育指導参事)

従来、小学校の課題は高学年に行くにしたがって専門性の高い教科を担当が一人で持たなければならない、特に近年は英語が教科化になったのも含めて、負担感が大きくなって5、6年の担任をやる教員が学校の中で限られてきているのが現状である。それを考えると、義務教育学校は大変可能性が高くて、教科専科の先生が小学校で入る事ができて、小学校の高学年の段階から専門的な教育を受けることができるという大きなメリットと、もう一つは定期テストの話もあったが、小学校の単元テストで全て終わっていた子ども達が中学校で急に長い単元でのスパンでのテストを受けると言う抵抗感が小学校のうちからかなり解消されると言う事にもメリットがあると思う。これについては、中央教育審議会の中でも小学校の専科制という事は言われているが、教員定数が変わらない限りきつとすぐにはならないという事で、この義務教育学校の方が早く実現できると思っている。この義務教育学校は、すごく面白くて、学校経営でいうと夢があって、学年の区切りを作れること、中学校3年生が小学校1年生にどう向き合うのかという面白さもある。子ども達の成長を誰がどのように見取っていくのか。小学校の先生も、中学校の先生も1年生から中学校3年生までの子どもたちをずっと見ながら、その成長をどうサポートしていけるのかという面も含めて、この学校を作る事に携われる、本川校長先生、嶋校長先生は大変羨ましい存在だなと感じている。今、校長二人で頑張っているのでさまざまな問題も含めて夢のある、きっといい学校を作ってくれと期待している。

(松尾委員)

阿寒湖では6年生の次は7年生なのか、中1なのか。

(森教育調整主幹)

1年生から9年生である。

【公開案件】 報告事項

(2) 幼稚園、小・中学校の校内研修における研究主題について

(松本総括指導主事)

各学校の今年度の研究主題がまとまったので、報告する。

最初に小学校の傾向だが、26校中9校が全教科、4校が「国語」、7校が「算数」を研究教科とし、「主体的・対話的で深い学び」に基づく授業改善を主題に掲げ、校内研修を進めている。また、昨年度から小学校で実施となった「特別の教科“道徳”」の研究に取り組んでいる小学校は6校となっている。

次に、中学校の傾向だが、15校中11校が全教科、今年度から教科化となった“道徳”の研究に取り組んでいる学校は4校となっている。わかる授業づくり、「主体的」や「学び合い」「対話的」等、新学習指導要領を踏まえた言葉が、研究主題や副主題に設定している学校が多い傾向となっている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

今までの定例教育委員会の中で話題になっていた中学校の研究の取組という事で、中学校では教科の壁があって、例えば、数学でこうあってほしいと思っても、他の教科の先生方の協力が得られない、そういう課題があるというのは出ていたが、研究主題だけから判断すると、一つのテーマをもって全教科を対象に研究で取り組む、となった時には入り口の部分では全ての先生方で共通認識を持つ、そして、ここは共通で全ての教科で取り組んでいこうというところまでは、中学校では取り組むことができる点では、それぞれの教科にメスを入れるためには非常にいい傾向ではないかと思っている。

(大山教育指導参事)

先日の校内研修の講座があり、そこで研究発表していただいた学校が中学校の道徳で阿寒湖中学校、教科指導では景雲中学校で、この2校は大変中味の濃い成果が上がっている研究だったので、それは各学校で参考にしてほしいということで、校長会で話もしているので、各学校の研修も少しは深まると期待している。

【公開案件】報告事項

(3) 令和元年度釧路教育研究センター研修講座事業について

(松本総括指導主事)

今年度は、授業実践力向上と生徒指導関係・特別支援教育・教員の資質向上等をねらいとして、32本の講座を開催する予定である。先生方には、年間一人1回以上は講座に参加、また、特別重点講座については必ず1校1名以上の参加をお願いしている。

研修講座の内容をいくつか、簡単にご紹介する。

「国語科教育」「算数・数学科教育」「基礎基本の定着を目指した算数・数学科の授業づくり」は、市教委独自で設置している「基礎学力検証改善委員会」と共同研究を行い、釧路市の課題改善に向けた取組を提案する。また、本年度も「学力向上セミナー」との結び付きを持たせながら実施していく。

「プログラミング教育」では、授業公開と体験研修をとおして、プログラミング教育への理解を深め、「外国語活動・外国語科の授業づくり」では、授業公開や研究協議をとおして、外国語教育のイメージを深めることをねらいとしている。また、この2つの講座は、次年度から小学校において全面実施となる新学習指導要領を見据えた講座として位置付けている。

「ふるさと教育」、「キャリア教育の充実」、「UDを意識した授業づくり」については、新学習指導要領でも求められる視点であるが、これらの講座は、釧路教育研究センター研究専門委員会において進められている調査・研究内容をもとに実施する。

「いじめ・不登校・児童虐待への対応」については、スクールソーシャルワーカーにも協力いただき、関係機関との連携や組織的な対応等、実践力の向上をねらいとして実施する。

「学級経営の充実～LGBT研修会～」では、今日的な教育課題でもあるLGBTについて教育大学戸田准教授よりお話いただき、一人ひとりの個性を尊重した受容的な学級集団づくりについての研修を深める。

「釧路市の教育～採用2年目の研修会～」では、採用2年目を迎えた教職員を対象とし、釧路市における学校教育の現状についてや教育委員による講話、市内公共施設の見学などを通して、今後の教育活動の在り方について研修を深める。

「公開研に行こう」は、公開研究会である。今年度は美原小、美原中、東雲小の3つの市教委の研究指定校と、昭和小、武佐小、芦野小は自主公開研究会を予定している。

なお、来年2月に予定している「教育講演会」だが、毎年一般の方にも多数ご参加いただけるよう、著名な講師を選定し実施する。今年度の講師については、最終調整段階となっており、正式決定次第報告する。

教育支援課指導主事としては、研究の各校の校内研修もそうだが、各学校の学校力の向上のため学校への訪問をできるだけ多くし、新学習指導要領の周知や移行措置の徹底などに向け、各校のニーズに応じた指導・助言を行えるように努める。また、釧路教育研究センターでは、教職員一人ひとりの資質向上はもとより、今日的な教育課題、喫緊の課題、ニーズに幅広く対応した研修講座を準備するなど、さまざまな活動を通して、釧路市の教育の底上げに取り組む。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

今まで、この場で私たちが話して、こうあった方が良くはないか、こうあるべきだ、というものはいろいろな形で取り入れられながら、非常に中身の濃い充実した研修講座が用意されていると思うので、是非多くの先生に参加してもらって、一人ひとりの先生のスキルがアップされるような結果を期待したい。以前に、「釧路市の教育」を配布してもらい、非常に中味濃く工夫された内容がここに網羅されており、全ての先生方に読んでもらって、参考にしてもらいたいという願いを込めて発行していると思う。今までの説明だと、先生方が手にして熟読するということまではいってないのが現状だと思う。いろいろ考えて校長先生方、教頭先生方に、一人ひとりの先生方にしっかり寄り添ってくれという願いをいろいろな場面で発信しているが、その一つの方法として、校長先生方、教頭先生方に読んでもらい、これはあの先生に使える部分だよなという、ここから得られた情報を元に、「この辺参考にやってみないか」ということが寄り添うという事になるだろうし、そうすると全部読まなくても、自分はここの部分を参考にしようと、校長先生、教頭先生のアドバイスで注視する。そういうことが、「釧路市の教育」の活用に繋がるのではないかと、是非そのような方向で各学校、検討していただきたい。

(松本総括指導主事)

私たちも、凄く頑張って作っている大切な資料なので、校長会、教頭会でもお話をさせてい

ただくとともに、今年度、研修講座や先程お話しした学力向上セミナーを研修の際に持参いただくよう要綱等に入れさせてもらって、いろいろな機会で見られる場面を増やしたいと考えている。

(松尾委員)

「学級経営の充実～LGBT研修会～」について、LGBTの子どもは実際に今いて、戸田先生も専門的な話をしてくれると思うが、実際にこういう事で困っている先生がいるのか。

(松本総括指導主事)

昨年度までの調査等で確認したところによると、現状では釧路市内ではそのような報告は正式には受けていない。ただ、だからといって、現実にそういう子がいた時に理解をして進めるという事ではなくて、今後、考えられるという事は当然あるので、先生方の方に早くから準備していただきたい、という思いでこの講座を継続して行っている。

(松尾委員)

小学生くらいだと、それほど見た目でも分からないし、元気すぎる女の子などは沢山いると思う。中学校くらいになると、逆に目立ってくるかなと思う。いろいろな事が考えられるので大事なことだと思う。そのあたりを意識して先生方に出席してもらえるとありがたいと思う。

【公開案件】 報告事項

(4) 学校の現状について

(大山教育指導参事)

初めに確かな学力向上推進事業について報告する。

4月の校長会の終了後に、「重点施策課題市長ヒアリング」があり、その中で市長から「全国学テのように単年度の成績を比較して方策を考えても効果は上がらない。同じ子どもの成績が学年ごとに伸びているのかを比較して伸びた要素を「学力向上プラン」に反映させることが必要。そのために釧路市標準学力検査に予算を付けた。」とのお話があり、その指摘を受けて、7月までにすべての学校の経年変化のデータを揃えて、各学校の校長にはその旨、伝えてある。このことで、目標は全国平均を超えるということだが、そのために学年の経年変化を比較することで、全ての学校で学力向上の成果の見える化が図られると考えられる。つまり、学校によっては絶対無理だと諦めている校長先生もいない訳ではないので、そうではなく、今の現状の子ども達を伸ばしていく事が最終的には目標の到達に繋がると考えている。

校長会で $(Y=aX+b)$ という資料を配布し、読むと各学校が何を大切にしなければいけないかということが分かるかと思う。家庭や地域の環境等に関係なく私たちは教育成果を高めることが求められているので、各学校ではそのことを踏まえて学力向上プランに反映させていきたいと考えている。

次に基礎学力検証改善委員会について報告する。

今年度の委員会では、算数・数学科部会の委員を3名増員した。担当者には、「分析を詳し

くするのではなく、よりよい指導事例を示して、すべての学校で実践できるように」と指示をしているので、増員により具体的な指導事例を示していただくことを重きにおいている。また、委員長の梅本教授は元校長会会長で中学校のベテラン校長先生なので、中学校における学力向上について直接アドバイスをいただいている。1回目の委員会の際も、中学校における複数の教科担任の場合の学年の持たせ方や教科経営案の有無、また担当教員の指導力によって平均点で10点以上差が出るという話も聞いた。今後とも中学校への対応策などアドバイスをいただきたいと考えている。また、今回この委員会で話された事が各学校で指導に生かされなければならないので、その次の学力向上セミナーの開催を昨年度より変えている。特に中学校数学が課題になっているので今まで中学校国語科、数学科を同一に開催していたのを中学国語科、数学科を別日で3回とも開催して、中学校の数学科の教員は必ず1回は参加できるように校長にも要請している。

各学校の校長先生には、自校の教職員の資質などの向上のためにも、学力向上セミナーやセンター講座への参加を積極的に促してほしいと依頼した。気になるのは、今まで参加したい教員が参加しているが、無理やり参加するという事は、参加態度に問題がある教員が現れる可能性があるので、各学校でその事も含めて参加の意義や態度も含めて校長先生からご指導をお願いしたいと話している。

次に研究指定校について報告する。

城山小学校、大楽毛小学校、大楽毛中学校の3校が今年度の研究指定校という事で、昨年度からの3校と合わせて6校になる。特に、大楽毛小学校、大楽毛中学校についてはコミュニティ・スクールで小中連携を行っているので、その成果の発表をしていただける事になっている。交通事故の安全徹底、経営訪問についてもこの中で知らせている。

また校長会の中で、市長がどういう考えを持っているのか、教育長がどんな考えを持って、そして教育委員さん方がどんな考えを持っているのかを校長先生方に伝えようと思っており、先生方に寄り添うという話も、教育委員さんからこんな話が出ていますと話したので、今日いただいた話も、校長先生方には伝えていきたいと思う。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

大山参事から説明があった($Y=aX+b$)これは、私もそのとおりだと思う。全国学力実態調査の報道での取り上げ方について、全体としてまだ平均点に達していない、釧路市の教育課題ありと取り上げられると、どうしてもそれに意識がいき、学校現場の先生方も校長先生も短絡的な方向性に走ってしまう傾向がある。しかし、釧路市内の特に中学校をそれぞれイメージすると、いろいろな地域性だとか、あるいは近くに、成績上位の子どもが進学する学校があったり、そういうところに全国平均突破してないからあなたの学校はだめだと言うのは、どうなのか。逆にうちの学校は全道平均突破している、良かった、で終わってしまっている学校も無きにしも非ずだと思う。先程示してくれた資料は、プラス5の学校レベルがプ

ラス7にするプラス2ポイントが結構勢力が必要だと思う。努力して成果が出ている学校に更に成果を出せと、プラス2ポイントは結構大変である。しかし、マイナス10ポイントの学校がマイナス5にするという、プラス5ポイントは結構容易である。だからトータルとして、それぞれの学校が目標をどこに置いて頑張らせるか、トータルとして釧路全体の成果が上がるというように捉えていかなければならないと思うので、やはり前の年度よりうちの学校プラス5ポイントになった、伸びている、では来年は更にプラス3ポイント目指そうという、それぞれの学校の実態に基づいた経年変化を重視して取り組んでいく事が必要ではないかと思う。全ての校長先生方も、先生方もそこを意識して頑張ってもらいたい。大分前の話で、釧路小学校の4年生の子どもが当時の校長先生に「自分たちは、どんなに頑張っても東京の大学に行けないんでしょ。要するに、釧路の子どもたちは学力が低いからダメなんですよ。」と伝えた事があった。釧路の学力は低いという報道を見て、子どもたち自身も自信をなくしているという話だ。是非マスコミの方も釧路の教育、子どもたちがこれだけ頑張って、成果を上げているという報道をしてもらえれば、自信にも繋がるし全体としてのやる気にも、学校教育全体の活性化にも繋がると思う。マスコミ関係者にはそうあってほしいと思う。

(小出委員)

資料を見た時に、目から鱗が落ちるような感じで、今までは一律目標何点とやっていたところを個々のそれぞれの成長を促すという考え方なのかと捉えて、それが本当のそれぞれの子どもの成長を促す事に繋がる、ただ点数を上げるという事だけではなく、そういう方向性で進んでいけば自然に上がるという、それが本当の教育というか考え方なのかと感じた。

(種村委員)

前から問題になっていた、小学校6年生の時の成績と中学校3年になっての成績が著しく落ちていると言う現実があるので、教育委員会の中でどういう原因があるのか、その解決策をどこに見出していくかという、そういった突っ込んだ話というのは、あるべきだと思うが、どうなのか。

(大山教育指導参事)

小学校から中学校に入った時の下がり具合は気になっており、いろんな分析をして、根本的な都市伝説のような、いろいろな言われ方をしているがどうも実態とは違うという事がいくつか分かってきて、最終的には教師の指導力にどうしてもいってしまう。なので、指導力という事を考えると、やはり中学校の先生方がどのように頑張らなければならないかということに落とす。それで、この資料は学力が全国平均いなくていい言い訳のために出した資料ではなくて、学校は自分たちの子どもたちが本当に成長したのかどうかを見てほしいと言う意味で、この資料を出しているの、中学校が小学校の成績がなぜ下がったのか、それぞれの学校でまず考えてもらわなければならない課題だと捉えている。